

介護老人福祉施設のトリアスで私が働き始めて1年半、「自分が頑張れば、機能訓練指導員が視覚障害者の職種選択肢の一つになるかも」という思いで仕事に取り組んでいます。

実際に働いてみると、やる気だけではなかなかうまくいかないことばかりです。働き始めて見えてきた課題は2つ。一つは職場で視覚障害者を雇うのは私が初めてなので対応に戸惑いがある事。二つ目に職場の方々に、あはき師(※1)の機能訓練指導員の業務について理解していただけない事です。

しかし、先天性弱視である私は、自分の障害について相手に説明することが苦手です。それは、私が見えている世界がどんな風に違うのか、どんなところが皆さんより見えにくいのか分かりません。それは、私が生きてきた世界であって、普通の見え方を経験したことがないからです。

それらの問題を解決するために、2つの説明資料を作成しました。「私見え方説明書」と「機能訓練指導員の仕事紹介」です。見え方の説明書では、眼科の先生や盲学校の先生に協力して頂き、機能訓練指導員の業務以外で頼まれたことや、私のできそうなことを介護の業務別に「できる」「できない」「補助があればできる」に分け、「どんな事を工夫すればできるのか」などを挙げました。仕事紹介の説明書では、上司と相談し、職場に合った具体例も挙げ作成しました。これらを配布したことにより、同僚からは「こんなに見えてないと思わなかった」や「こんなにできることがあるんだね」と様々な意見をいただき、誤解なく見え方や仕事について伝えることができました。

それでも、「見えにくいのに歩行訓練させていいのか」や「機能訓練指導員がいたって利用者様の機能は向上していない」等の負の意見が聞かれました。私自身も、「自分はいてもいなくても変わらないのでは」と思うこともありました。

しかし今では、リハビリを楽しみにしてくれている利用者様たちのために自分なりにできることをやろう、と思っています。そう思えるきっかけとなった事例を紹介します。

その方は、70代の女性利用者様です。脳梗塞による片麻痺と手指の拘縮などがあります。お話好きですが口をうまく動かせないため言葉が聞き取りにくいです。機能訓練指導員は一人の利用者様と接する時間が長いので、丁寧に話をしながら聞き取ることができます。ある日のリハビリの時、「宮川さんになら言える。食べ物を手で潰さずに食べたい」とおっしゃいました。やわらかいものを食べる時、手でつぶしてしまうのが悩みとのこと。そのため、訓練時、手に触れながら握力を調整するリハビリをはじめました。私が支持した加減で私の手を握って頂くというものです。最初はなかなか調整できず、ご本人が思っている力と実際の力の調整が取れていなかったこと、食べたい気持ちが先行して潰れる前に早く口に入れようとしていることが分かりました。毎週リハビリを繰り返していたある日のこと「今日のおやつ潰さずに食べられた、宮川さんに一番に伝えたかった」とおっしゃってくださいました。その時、未熟な私でも機能訓練指導員として利用者様の役に立てるのだ、という喜びを味わいました。

社会人2年生の私は、まだまだ勉強する事がたくさんありますが、私なりに利用者様の生活が少しでも明るくなるお手伝いをしていきたいです。見えにくいから諦めるのではなく、見えにくい状況の中でどう工夫すればやり遂げられるか、という事を大事にして、早く一人前になれるよう精進していきます。

視覚障害を持った者が、正規職員として特別養護老人ホームの機能訓練指導員業務に就くのは、県内では珍しいと聞いたことがあります。最後に新卒の私にこのような役割を与えてくださったトリアスに感謝申し上げます。

(※1 あはき師：あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の3師の略称)